
学園黙示録×コール・オブ・デット

ダス・ライヒ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録×コール・オブ・デット

【Nコード】

N6394T

【作者名】

ダス・ライヒ

【あらすじ】

学黙とコールオブデューティやゾンビ映画などをクロスしたコラボ小説。ジョージロメロでもあります。

実在の人物と主力キャラの紹介（前書き）

ゾンビの生みの親と主役の紹介です。

実在の人物と主力キャラの紹介

ジョージ・A・ロメロ

CV…大木民夫？

武器…撮影用照明機

ゾンビブームを巻き起こした人。自称ゾンビの生みの親。

ラスボスであり、70代とは思えぬ機動力有する。

学黙の奴ら発生原因が一切不明な為。

「いつそのことロメロがゾンビにさらわれた事にしてしまえ」と言うことにした。ちなみにゾンビを見ると心が躍るらしい。

こちらを<http://www.nicovideo.jp/watch/sm14357966>

コルティン大佐

CV…江原正士

武器…M16A3、P228、AT4、ピッチフォーク

白人で元軍人の俳優、年齢は40後半。

大佐などと名乗っているが実は除隊階級は大尉である。

一応主役だが、まったく出番がない。

カール

CV…二又一成

武器…MP5A1、AMTハードローラー、スコープ

黒人で元軍人、俳優

除隊階級は准尉、コルティンと同じくまったく出番がない。

イワン

CV…青山穰

武器…AK74、MP443、釘バット

ロシア人、何故かアメリカで俳優してる。
無論、出番はまったく無い。声はリヒトーフエンと同じだが気にしてはいけない。

エディ

CV…成田剣

武器…M79、M1897、M93R、斧

4人の中で唯一のイケメン、

やや危ない性格、もちろん出番はまったく無い。

？

CV…MOKO

武器…FG42、ステンMk2、Mk5、P232

正体不明な少女、名前は後で明らかになります。

まさに究極の美少女、だが貧乳だ（某電波主人公風に
しかも多重人格者であり、同性愛者である。

最初は第1降下猟兵師団の衣装で登場。

奴らに噛まれても奴らにはならない。

出番は上の4人を差し置いて多い。主人公にするか。

羽方蓮縫

CV…茨原聖人

武器…角材

もう1人の主人公、中の人が某ギャンブルアニメの人だがそこは気にしてはいけない。

高校三年生、そこそこの金持ち。

学校に奴らが現れ、戸惑うがその持ち前の知能で生き残る。

カオジじゃないよ！絶対！！

序章

とある廃墟にて、ゾンビ達に4人の男が囲まれていた。

「俺達、囲まれてる！」

と、年輩の白人の男が叫んでいた。

彼の名はコルティン大佐、元軍人である。

自称大佐と名のつっているが除隊階級は大尉である。
カーネル

陸軍士官学校出身者、初陣は湾岸戦争で二階級特進したが、アフガニスタン軍事作戦を最後に除隊した。

「クソ！入るんじゃないかった！！」

と叫ぶ黒人の男カール、彼も元軍人である。

イラクを最後に除隊した。

「まあ、ストレス発散には持ってこいだな。」

妙に落ち着いてる男イワン、実はロシア人である。

何故か一緒にいる。

「冗談じゃねえ、バイトの時間までに帰れねじゃねえか。」

このむさ苦しい男達の中で唯一の美男エディ、暇つぶしで着いてきた。

4人はピッチフォークやスコップ、釘バット、斧を振りまし、暴れていたがイワンが空振りをした。

するとゾンビが急に喋り始めた。

「こいつ、また外しやがった！」

「カット！」

と、70代の老人が言った。

そう彼の名はジョージ・A・ロメロ、初のゾンビ映画を創った男である。

ちなみに此所はスタジオ、映画撮影であり4人は俳優でありもちろん監督はロメロである。

「目付めんたまいてんのか、貸せ！」

強引にカールからスコップを取り上げるロメロ氏、

「こうやるんだ」

その取っ手でコルティンを殴った。

「痛てゝゝどうして俺ばかり！」

殴られるコルティン、この声のせいであろうか

「そうじゃない、こうするんだ。」

続いて釘バットの取っ手で殴るイワン、

「お前までなにしやがるロシア野郎！」

叫ぶがエディが何かをする。

「こうだろう」

コルティンに蹴りをいれた、さすがにこれはふっ飛ぶ。

後ろの辺りから酔っ払いの様な謎の男がこっちに來るが全然気づかない4人、

しかしロメロ氏は気づいた様だ。

「なんだそいつは、地獄でメイク仕直してこい。」

捨て台詞を残すロメロ氏かし、

「さあ、行こうぜ。」

連れて行こうとするゾンビ役だったが、引き離す謎の男、奇声を発しながらロメロのもとにダッシュで駆け寄りロメロをさらっていった。

たちまち、謎の男の様な男達が現れた、用はゾンビである

「エキストラ共か、何だか全員衣装が違うが」

「知らねえーよ、だいたいこんなの台本に無いぞ。」

「ならば作ればいい、名付けてウジ虫大虐殺。」

「どっかで聞いたことのある台詞だな、よっと!」

動揺することなく次々とゾンビを殺していく4人。

撮影用と思っていた武器で何故殺せるのかは気にしてはいけないう。こうしてゾンビパラダイスが始まった。

序章（後書き）

やっと書けた。

今後4人の出番は未定です。

4人「え、」

地獄へようこそ（前書き）

一ヶ月も更新を放置する作者、
こんな作者の小説を見ってくれるのであろうか。

地獄へようこそ

ここは何処かの高等学校の生徒会室、二人の男子生徒が呼び出されていた。

「だから俺は。」

まるで何処かの某ギャンブルアニメの主人公のように言い訳する男子高生。

その名羽方蓮縫、何処にでもいる高校三年生である。

何故呼び出されたのか？それは器物破損。

理由はどうあれ、呼び出されること間違い無し。

「学校の所有物を壊したんだ、それなり覚悟してもらおうか。」

体育教師の説教の最中にガシャン、ガシャンと物音が聞こえてくる。それは男がひたすら門に体当たり音だった。

「なんだ、不審者か？よしお前らそこで待ってろ。」

そう言い残し体育教師は生徒会室から出て行った。

「ふう〜退学か留年になるよりマシか、高島、お前のせえ、て、あれ？」

「抜き足、差し足、忍び足。」

「おい！お前！なに逃げてんだ！」

「ギク！」

脱力系キャラ様な男子高生は名は高島葉、
まるで何処かの国の擬人化漫画の主人公の顔をした頭がお花畑な高
校三年生である。

蓮縫とはクラスメイトとである。

「おいおい、いつの時代のギャグ漫画だよ、全く。」

「だって、お説教やだもん。」

「はぁよく留年せずにいたな。」

いつも道理毎日が過ぎていく、そう思った、だが。

「キヤアアアア！」

突如、女教師の悲鳴があがった。

「悲鳴？」

蓮縫が振り返ると門に体当たりをしていた男が体育教師に噛み付く
瞬間だった。

「おう、まるでゾンビ映画のワンシーンだ。」

「感心してる場合か！血が出てんだぞ！血が！」

相変わらずぼけっとした発言をする高島、あまりにも衝撃的であつ
た為に戸惑いを隠せない蓮縫、

体育教師はその場に倒れた、近くにいる二名の教師は体育教師の側へ駆け寄る。

だが何事も無かった様に起き上がる体育教師、だが、

ガブ！

その体育教師が女教師に噛み付いたのだ。

サスマタを持った男教師は慌てて校舎内に逃げ込んでいった。

そしてまたあり得ぬ瞬間が起きた、なんと地中から人が這い出てきたのだ。

「ゆ、夢でも見てんのか俺は。」

まるで映画の様な光景が広がっていたのだから。

這い出てきた、ゾンビ（ソレ）は蓮縫達のいる部屋にダッシュで向かって来た。

「に、逃げんぞ。」

「夢だったら抓れば、」

「馬鹿が！ともかく何処か安全な場所に！」

そして二人は生徒会室から飛び出した、こうして地獄が始まったのであった。

地獄へようこそ（後書き）

何か書くのがめんどくさい、おっと口が滑った。
誤字脱字があればご報告を。

地獄へようこそ2 (前書き)

最初に言っておく、更新は気まぐれだ。

某王子「な、何ィ!？」

地獄へようこそ2

「ち、畜生・・・！一体何がどうなってやがる・・・！」

生徒会室から飛び出した蓮縫達、そのまま踊り場まで走る。

「（確か、あそこに電話台があったはずだ・・・！あれで助けを・・・）」

あっという間に電話台着きポケットから小銭を取出そうとするがポケットに小銭は無い、隣にいる高島に目をつける。

「クソォ！高島、小銭を出せ！携帯でも構わん！」

「携帯ならあるけど・・・」

「貸せ！・・・畜生、何故繋がらない！」

「どうして・・・？」

「警察に殺到してんだ、それに外からサイレンの一つも聞こえやしねえ、町中に先見たゾンビみたいなのがいるってことだ・・・！」

「じゃあ、どうすれば・・・！」

「何処かに立て籠もるか、屋上に上がって助けを待つか、学校から出るかだ・・・！いずれにせよ、安全な場所は無いと思うが・・・」

確かにこの死者の世界と化したこの世界には安全地帯はほぼ無いとされる、しかしあるとすれば日本にもある。

「まあ、今頃速攻封鎖されてるがな」

「よし、伊藤さんも連れて行こう」

「てえ、今から呼びに行くのか！？悪いことは言わん！やめておけ！」

「なんで？」

「行ったら行ったで大変なことになる。死にたいなら別だけどな」

彼の読みは上の階に行けばパニックに陥った生徒達が階段に殺到すること、こうなってしまったら上の階に上がれず、我先にと迫り来る生徒達に押し潰され、そのまま圧死・・・！そう高島に言い聞かせると、次に職員室行こうとするが、

「伊藤さんは運動オンチなんだ、助けないと・・・！」

「お前、何言ってるんだ・・・！もうすぐ」

言い切る前に放送が始まった、「やっと気付いたか」と蓮縫達。

『全校生徒に連絡します！校内で暴力事件が発生！生徒は教師の指示に従って、イヤアアア！』

『痛い！し、死ぬ！ぎゃあああああああ』

蓮縫の読み通り上の階から悲鳴が聞こえてくる。

彼はこう思う、奴ら（ゾンビ）の数はかなり増えるだろうと・・・！

地獄へようこそ2（後書き）

み、短いよねこれ、まあ更新は何時になるやら。
それよりも歌詞の無断出来ないらしいよ、まじで。

ドイツ戦車兵「何い！？これではパンツァーリートが歌えないじゃないか！」

誤字脱字があればご感想を。

地獄の学校だ！（前書き）

作者「ステンガンを使うと言ったな、あれは嘘だ。」

矛盾があったため、武器を変更します。

ステンガンMK?≫MP40

地獄の学校だ！

その頃屋上では、

軍服姿の小柄な人間が倒れていた、よく見るとその軍服は第1降下猟兵師団の制服であった。

スピーカーから流れる音で降下猟兵？は目覚める。

「んゝ、煩い！！」

その場にあったヘルメットを投げつけた。

そのヘルメットは1938年に開発された降下猟兵専用のヘルメットである。

引っ掛かり難くするためシュタールヘルムヘルメットの全方位の部分を削り取ったそのヘルメットは見事スピーカーに命中した、どうやら声からして少女のようだ。

目が覚めたのか辺りを見渡す。

やっと自分の置かれている状況に気付いたのか、自分の装備を
確認^{チェ}し始めた。

MP40短機関銃、専用弾倉×6

FG42自動小銃スコープ着き、専用弾倉×3

P232自動拳銃、×専用弾倉×10

M24型柄付手榴弾×2

その他、空挺用ナイフ、ケーキ、水筒、鉄十字勲章、双眼鏡、何か変な物、変な鞆、消音器（MP40用）、

装備を確認するとその場を立ち去ろうとしただが、

「麗から離れろ！」

叫び声が聞こえた、もちろん声を聞いた彼女も声のした方向に走る。そして双眼鏡を取り出し声のする方向を見る。

状況からして女子高生が酔っ払いの教師？に襲われている。

それを男子高生二名はクラスメイトの女子を助けようとしている。

そして私の番。

と、勝手に決めるとFG42の セーフティ 安全装置を外しスコープを覗く、このスコープは狙撃用ではないのでやや遠目には撃てない、寝そべり目標に狙いをつける。

そして頭に狙いを付けると引き金を引いた。

一発目は頭から反れ首に命中、

男女三人は突然の銃声に驚く、だが教師はまだ動いていた。

この時彼女も気付いた、あれは単なる酔っ払いではなく、歩く死体 ゾンビ だ。

そしてまた引き金を引く。

二発目は頭に命中、

ゾンビは力尽きその場に倒れた。

男女三人もさすがに気付いたのか此方に視線を寄せのか少女は後ろに寝そべったまま後退する。

そして少女は窓を見つめ、その方向に向かって行く。

しかし窓にはガラスが張っており内部から鍵が掛かっている。

開けられないと判断するとF G 4 2の木製ストックでガラスを割り侵入する。

入るとF G 4 2からM P 4 0に切り替えM P 4 0に消音器付けそのまま学校内へ進んだ。

突然独り言を喋りはじめた

「そういえばあの金属バット持った男子高生、声が諏訪部順一だったね。」

地獄の学校だ！（後書き）

ジェラル星人「この小説の文字数が少ないのですが。」

魔王様「気にするな！」

誤字脱字があれば感想にて。

死人の学校（前書き）

星君「ちよつとくらい良いじゃないか。」

研「例え原作がエロくてもエロ表現は許されないんD A!」

死人の学校

前回、窓から侵入した謎の少女。

顔からして美少女と確認できる、身長は150?程度、胸と尻は残念だが童顔なので十分な可愛さだ。

話を戻そう、ガラスが割れた音に気付いたのか少女の方向へ奴ら（ゾンビ）の一体が来た。

少女はMP40の標準サイトを頭に狙いを付けて単発で撃つ、頭に9mm弾をくらった標的は床に倒れた。

消音器が付いてるので周りにいる者は一切気付かない、目標が倒れたのを確認してから少女は探索を開始した。

まだ学校中にまだ悲鳴が聞こえている為、誰も少女の侵入には気が付きもしない。

少女は近くの部屋を調べることにした、ゾンビが居ないか確認する為だ。
チェック

そしてドアにノックした。

「宅配便です、判子をお願いします。」

言ってみたが誰も出なかった。

飽きたのか隣の部屋を調べもせず、何所かに向かった。

ちなみに少女はこの学園を知らない、少女は下の階に降りる為に見取り図を探すことにした。

壁に沿って歩いて行くと見取り図は直ぐに見つけた、階段の位置を確認すると降りるために階段に向かう、階段を見つけると降りて行った。

降りると4人の高校生ゾンビが肉を喰らおうと少女に襲いかかって

きた。

少女は頭に狙いを定め12発程度撃つ、何発か外れて天井に当たったが確実に4人とも仕留めた。

そして少女は既に息絶えた4人のうち女子高生の胸を触る。

「おゝ結構でかいな。」

少女は先に進んだ、ゾンビ数十体が前にいるがお構いなくMP40を構え一体一体頭に狙いを定めて仕留めていく。近くで悲鳴が聞こえたり断末魔が聞こえてくるが気にもせず走っていく、MP40の弾が切れたのに気付くと弾倉を交換すると再び同じことを繰り返す、何人か少女の姿を見て助けを呼んだがその少女は無視する、悲鳴も段々聞こえなくなっていき空はオレンジ色に染まっていた。

少女が踊り場辺りに来ると悲鳴が聞こえた、聞いた少女は直ぐに階段を見つけ降りる。

すると中の良さそうな2人の女子高生がゾンビに襲われていた。

1人は階段の下の複数のゾンビに掴まれおりもう1人の方の足を掴んでいた、そのもう一人は後ろにゾンビ3体がいることに気付いてない、このまま放って置いたら2人ともゾンビに喰われ仲間入りしてしまうだろう。

そして少女は2人共助けることにした。

まず仲の良い女子Aの後ろにいるゾンビ3体の頭を撃ち抜いていく、そして仲の良い女子Bを掴んでいる複数のゾンビを空挺ナイフで頭を刺しMP40を他のゾンビに撃ち込んでいく、やがて全てのゾンビが動かなくなると少女はMP40の弾倉^{リロード}交換を始めた。

「あ、あの、先は助けてくれてありがとう・・・。」

「姉妹かなニかですか？」

「いえ、ただの友達です……。それとその格好は自衛隊か何かなの……？」

少女は質問された、そしてこう答えた。

「え？ 自衛隊じゃないです、降下猟兵の制服です。」

「「降下猟兵？」」

ハモったことが気になる少女だったがあえて聞かなかった。

「ドイツの落下傘部隊です、それより着いて来てくれませんか？ 何処か何所だか分らないで。」

こうして少女は2人を仲間にいれることにした。そしてまたガラスの割れる音と悲鳴が聞こえた。

「うわあああああああ！！」

死人の学校（後書き）

誤字脱字があれば感想にて。

次は登場人物紹介と設定です。

作者「俺にとって設定は全てなんだ・・・。」

平野「・・・・・・・・・・」

登場人物紹介と設定（前書き）

作者「まさか、この紹介に他の作品が含まれているとは思えない。」

リヒイトーヘン「では、登場人物と設定の紹介を始めよう。ワシの解説も入るからな！よく目を通すように！」

登場人物紹介と設定

小室一行編

小室孝

CV…諏訪部順一

武器…金属バット

持ち物…携帯、財布

学黙の主人公、別名女殺し。

決断力や行動力にとっても優れており、リーダーすらこなしてしまう
何だか万能な主人公。

しかもやたら女にもてる。（本人は麗に思いを寄せている）

そのせいか、少女から「こいつ本当に諏訪部ボイスのキャラなの？」
と言われた。

リヒートーヘンの解説

「なんて羨ましい奴だ！これ程むかついた奴はマクシスに続いて2
番目だ！」

宮本麗

CV井上麻里奈

武器…改造モップ

持ち物…無し

ヒロインその1、

父が警官な頭に触手の様な物を2つ生やした高校二年生。

槍術部に所属、留年したシヨックなのか紫藤に殺意を抱いてる。

少女からは声からして警戒されてる、しかも何故か彼女だけの命令
を受け入れる。

リヒイトーヘンの解説

「何だ、あれは宇宙人か？まあ、とにかくデカイ美少女だからな。
ぐへへへへへ」

高城沙耶

CV…喜多村英梨

武器…ドリル

持ち物…工具

ヒロインその2、

高いプライドと天才な眼鏡っ娘でツンデレな高校二年生。

少女からは「キタエリボイスな巨乳で眼鏡っ娘なツンデレは初めて
たぜ！」とコメントしている。

リヒイトーヘンの解説

「昔からピンクは乳乱と聞くからな、デレて何かしてくれるかもな。
」

平野コータ

CV…檜山修之

武器…ネイルガン

持ち物…専用弾倉×6個

自称、工具王。

肥満体型で眼鏡を掛けた高校二年生。

軍オタで銃に詳しい、普段は温和だが銃を持つと性格が好戦的になる。

実はアメリカの某PMCの訓練を受けている、そして家族構成は完璧。

少女からはひーちゃんと呼ばれている。モデルは某吸血鬼漫画の原作者。

リヒイトーヘンの解説

「正しく兵士に相応しい少年だ！ただし体型がな……。」

毒島冴子

CV…沢城みゆき

武器…木刀

持ち物…無し

名言を発したヒロインその3、

尻まで届く髪を持つ古風な淑女で接近戦を得意とする高校三年生。

しかしサディスティックな性癖を持っており、裸エプロンをするなど明らかに誘う様なことをする。

孝を好意寄せるようだが少女にも好意を寄せている、少女からは「沢城みゆきを傷つけないで！」と叫んでる。

リヒイトーヘンの解説

「何という大和撫子だ……！しかも明らかに襲ってくださいの様な格好……！気に入ったぞ。」

鞠川静香

CV福井裕佳梨

武器…無し

持ち物…医療器具

ヒロイン？その4

大学病医院から臨時派遣された校医、ナイスバディで巨乳で金髪で天然。原作では一行の中で高身長。

自動車免許は持っており、少女からは静香ちゃんと呼ばれている。一部からは「もう30間近なんだからしつかりしろ。」と言われているが本人は無視している。

リヒイトーヘンの解説

「今夜、空いてませんか？」

希里ありす

CV…竹達彩奈

武器…無し

持ち物…無し

親と一緒に逃げ回っていた小二、自転車の運転が得意。
今作品ではやたら変な霊に付きまとわれている。

リヒートーヘンの解説

「まさかサマンサじゃないだろうな、その暗い娘は君の友達か・・・？」

ジーク

CV…原田ひとみ

ありすと共にいた小型犬、その姿からか零戦を連想したコータから
ジークと名付けられた。

けしてジークハイルやジークフリートから取っていない。

リヒートーヘンの解説

「ワシに近寄るな！このワン公目え！」

井豪永

CV…宮野真守

武器…無し

持ち物…無し

孝の同級生、冷静な判断が可能。

原作では噛まれて、奴ら、になってしまうが少女の気紛れで奴らに
ならずにすんだ。

「映画やゲームではあるまいしゾンビと呼ぶ訳にはいかない」とゾ

ンビを奴らと勝手に命名した。

しかし少女やオリキャラ、他作品キャラは普通にゾンビと呼んでいる。ちなみに永井豪から取ったらしい。

リヒイトーヘンの解説

「誰だ、配役を宮野真守にしたのは。」

一条美鈴、二木敏美

CV…瀬戸奈保子、清水香里

武器…無し

持ち物…写真

藤美学園のとても中の良い女子高生二名。

原作では二人一緒に纏めて奴らになってしまったが少女に助けられる。

一人一人説明するのもめんどくさいので二人一緒に纏めた。

リヒイトーヘンの解説

「最後の説明は作者の悪意があるな、それとこの二人はレズビアンか？」

石田

CV…佐藤拓也

武器…ステンレス製の棒

持ち物…無し

誰だお前。

リヒイトーヘンの解説

「誰だお前。」

他作品編

タンク・デプシー（アメリカ人）

CV…楠大典

武器…レイガン、短機関銃M1A1トプソン、自動拳銃M1911、
M2破片手榴弾×6、ナイフ

持ち物…エレメンタ115の破片×16、トプソン用弾倉×10、
M1911用弾倉×10

アメリカ海兵隊の軍曹。

アメリカ軍の最高の勲章である議会名誉勲章を授章したアメリカの
英雄。

日本軍の基地から脱出する為、隠し持っていたヘアピンや勲章で部
下と脱出、それが原因でゾンビ狩りを命じられた。公式の記録では
戦死扱いされている。

リヒイトーヘンの解説

「デプシー君、今は解説中だ、後にしてくれ。」

ニコライ・ベリンスキー（ロシア人）

CV…間宮康弘

武器…サンダーガン、短機関銃PPS-43、自動拳銃TT-33、
K1破片手榴弾×6、鎌

持ち物…カートリッジ×20、PPS-43用弾倉×9、TT-33
用弾倉×10、ウォッカ

ウォッカに溺れた憐れなソ連兵。

台詞の半分はウォッカで、そして残りの半分は共産主義である。

何度か再婚しているが全員惨殺されたり射殺されたり斧で頭を吹っ
飛ばしたりとにかく危ない性格である。同じ同盟国のデプシーのこ
とは尊重しているが武雄とは日露戦争のことで少し仲が悪い。

リヒイトーヘンの解説

「この飲んだくれめえ、後ワシの嫁に触れるなよ！」

正樹武雄（日本人）

CV…林和良

武器…31ー79 JGb215、38式小銃、十四年式拳銃、日本刀

持ち物…カートリッジ×10、38式用クリップ×10、十四年式拳銃用弾倉×10、自決用太刀

大日本帝国陸軍の大尉。

祖先は名のある武士である、降伏するなら自決するという信念がある。

幼いころ猫の尻尾を刀で斬るなど少し危ない性格。

ゾンビと化した自分の部下達よりも生き残っているリヒイトーヘンらと共に戦うと決めた。

ちなみに正樹武雄はファンが勝手に付けた漢字である。

リヒイトーヘンの解説

「ワシは一緒に死ぬ気は無いぞー！」

エドワード・リヒイトーヘン（ドイツ人）

CV…青山穰

武器…ザップガン・デュアル／ウェーブガン、超兵器DG12、短機関銃MP41、モーゼルC96、

持ち物…カートリッジ×30、MP40用弾倉×6、C96用クリップ×10

ドイツ陸軍の少将で科学者。

かつては935部隊所属でマクシスの助手であったがマクシスがストレス解消に暴力を振るた為、

仕返しに娘共々テレポーターに放り込んだ。

それが原因でゾンビやヘルハウンドが放たれデアリーゼは崩壊する。

しかし本人は太平洋へワープして逃げた。
どうやら妹がいるらしい、そしてデプシーとは犬猿の仲でいつも口喧嘩をしている。

デプシーの解説

「俺が代わりに解説してやるぜ、俺のムスコ、に触りやがったガチホモ野郎だ、もしかしたらバイかもしれねえ。」

アルマ・ウェイド

CV…壺智村小真

F・E・A・R から突如参戦した少女。

手駒を使い、ありすを狙ってる模様（何故狙うのかは理由は一切不明）

人間を一瞬で骨に変えたり、悪霊のようなものを呼び寄せたりする超能力を持っている。

霊体のような存在なので主人公等の攻撃は無に等しい。

リヒートーヘンの解説

「噂では彼女を見て生き残った者はほとんど居ないそうだが、属に言う死亡フラグで奴か？」

学黙その他、オリキャラ編

羽方蓮縫

CV…茨原聖人

武器…角材

持ち物…財布、456サイ

至って普通の男子高生。

当初主人公になる予定であったが名無しの少女が派手に目立った為、準主人公に決定した。

実は大物の息子であるが現時点日本には居ない、けして某ギャングアニメの主人公では無い。

リヒイトーヘンの解説

「もはや声優ネタ全開・・・！」

高島葉

CV…浪川大輔

武器…箒

持ち物…小銭

国の擬人化漫画の主人公の様な天然な男子高生。

最初は頭の中身がお花畑の様な少年だったが、段々口調が天然とは思えない様になっていく。

リヒイトーヘンの解説

「こいつには何か裏があるな。」

伊藤栗須

CV…園崎美恵

武器…無し

持ち物…無し

高島が救おうとしている女子高生。

運動神経は絶望的で階段を上っただけで痛風になる、何だか肥満体型な少女の様だが実は巨乳美少女である。

リヒイトーヘンの解説

「大丈夫なのか・・・？それと巨乳が多いな。」

校長

CV…富田耕生

武器…M1897

持ち物…12ゲージ×10

藤美学園の校長。

何故かショットガンを隠し持っている。

学園をスタイルの良い女性ばかりにした原点である。

リヒイトーヘンの解説

「こいつか！学園を巨乳ばかりにした奴は！」

椎名ヒロシ

CV…？

最近のデットの主人公らしき少年。

ニコライの解説

「やっと俺の出番か、いってえコイツは誰なんだあ？」

立花さところ

CV…？

上と同じ。

リヒイトーヘンの解説

「……………ZZZZZ」

舟渡海

CV…アキラ・カネダ

武器…九九式軽機関銃

持ち物…バナナ型弾倉×6

個人輸入研究会所属、学校に銃を持ち込んでいる。

九九式軽機関銃はどうやって持ち込んだのかは不明。

リヒイトーヘンの解説

「こいつだけ何か違うぞ！」

設定編

藤美学園

床主市とか言う地方都市の山に在る全寮制高等学校。

原作者が近所の学校から取った様だが・・・？

リヒイトーヘンの解説

「よし、グーグルでクグッてみるか。」

床主市

日本の何処かの太平洋に面した地方都市。

カワイソウな右翼団体や左翼団体が沢山住んで居るんD A。
恐らく何所かの都市の読み方を変えたみたいだが・・・？

武雄の解説

「セッソウの記憶にはそんな地方都市は無いが・・・。」

テレポーター

ドイツ第三帝国の935部隊が開発した転送装置。

原動力はエレメンタ115を使っている。

当時の技術力で開発するなど無茶があったらしく開発は難航。

副産物としてゾンビとヘルハウンドを生み出してしまう。

W A Wではただの転送装置だったがB Oでは時空転送まで出来るようになる。

今作では異世界まで行けることが可能になっている。

リヒイトーヘンの解説

登場人物紹介と設定（後書き）

これで終わります。

気が狂ってる（前書き）

メイトリックス「なんでタグにCODを入れないんだ？CODシリーズのキャラが出てるのに。」

作者「今度暇があったら入れと言ってやるよ。」

気が狂ってる

少女達は男の悲鳴がする方向へ駆けつけたが、しかし既に遅かったのか男は何処かに消えていた。

窓の下を見ると悲鳴を上げていた男らしき人物ともう一人の男子生徒が落ちて死んでいた。

恐らく横から襲われて落ちたのだろう。

「ち、余計な悲鳴をあげやがって。」

舌打ちする少女であった。

「天皇陛下万歳――――！！！」

近い方向から別の男の叫び声が聞こえてきた、しかも銃声すら聞こえている。

少女達は銃声のする方へ向かって行く。

すると肩を負傷した男子生徒が壁に寄り掛かっていた。

こちらに気付くと大きな声で話しかけてきた。

「止まれ！向こうで気が狂った生徒が銃を乱射している、死にたくなければ近付くな！」

壁に寄り掛かって銃声する方を見るとゾンビなのか生きた人間なのか解らない死体が折り重なっていた、恐らく乱射していた男に射殺されたのだろ、男が持つて撃っている銃は九九式軽機関銃だ。

「そこかあ！」

男が気付いたのかこちらに九九式の銃口を向けて発砲してきた。運が悪いことに肩を負傷した男子生徒は跳弾した弾を頭に喰らって死んでしまった。

男はすぐに九九式の弾倉交換リロードを始めた、そして少女はFG42をフルオートにする。

「てめえらも噛まれているに違いねえ、奴らに成る前に俺が殺してやるぜえ!!」

男は少女達のいる方向へ再度発砲した、少女は男の方へ前転しFG42を間近で発砲した。

「ぐえ、う、ぶわあ! うわ、うわあー!」

男は数十発程喰らい窓から落ちて死んだ。

すると美鈴が紙らしき物を持っていた、その紙によるとその男はこの学園の生徒で個人輸入研究会の部員だそうだ。残念ながら九九式機関銃と一緒に落ちて回収出来なかったが。

そのことは気にせずFG42のリロードを終えるとMP40に切り替え前に進んだ。

また悲鳴が聞こえてきたが少女は無視して行く、教室の前を来るとゾンビの集団が誰かを喰いあさっていた。少女はM24型柄付手榴弾の下のピンを抜きゾンビの集団に向かって投げた。

ボン! と大きな音をたて周りのゾンビが吹き飛ぶ、何体かは生きておりそこら辺を這いずり廻っていた。また銃声が聞こえてきたが今度は遠くの方角だった、少女は銃声のする方向へまたもや走っていく。

走っていくとすぐに着いた、そこに一体のゾンビが胃腸を引っ張られていた。

それを見た後ろの二人は見えない様にしていたそして少女はその場で吐いた、すると年輩の男の声が聞こえてきた。

「一度やってみたが手がぬるぬるして気持ち悪いな、今度からは手袋付けてやるか。」

「校長先生！」

突然二木が校長らしき年輩の男に向かって叫んだ、しかし校長は。

「何だ？何か聞こえた様だが、誰が叫んでも手遅れだがな、フハハハハ！」

無視した、そして笑いながら散弾銃を撃ちながら駐車場に向かって行った。

気が狂ってる（後書き）

誤字脱字があれば感想にて。

それにしても長文字が書けない。畜生、魔女のバアさんの呪いか！

職員室へ（前書き）

某軍曹「いままで何をしていた？」

作者「サー！更新をサボっておりました！」

某軍曹「馬鹿者！すぐに作業に取り掛かれ！！」

作者「サーイエッサー！」

職員室へ

校長が駐車場に逃げていた後、少女達は一階へ降りていた。

当然、奴らは一階にも居る。無論少女はMP40で奴らの額に穴を空けていく。

その分弾倉の中身がどんどん無くなっていく。

そしてMP40の弾切れを起こしが少女は何故カリロードをしない。近くの窓に鞆から出したガムテープを貼り、音も立てない様に窓ガラスを割り三人は部屋に入った。

そこに一人の生存者が居た、容姿は身長170?くらいでスレンダーな美少女だ。

「ひい!だ、誰!?」

「怪しい者では無いです、ちょっと休憩させていただきませんか?」

「そ、それよりその迷彩服、自衛隊・・・?」

少女はまたか、と思う。

「この制服は降下猟兵のものです、知ってますか、第三帝国」

「制服?あーだから銃も古くさいの。でも悪くない無いな、後ろの二人は姉妹?」

「いいえ、姉妹じゃ無さそうです。ただの中の良い女子高生です。」

「そんなことはほっといて、貴女達は誰も噛まれてないよね？」

「誰も噛まれていませんが、他に何か？」

「無いのよ別に、それよりそれ本物？モデルガンじゃ無いよね」

聞かれたので少女はリロードしながら答えた。

「本物ですよ、触ってみます？」

「イヤ、いいから。それより貴女達はこれからどちらに？」

「職員室」

「職員室？二階から行った方が早くない？何故わざわざ一階まで」

「ゾンビが沢山居るからです」

「へえー迂回したの。でこれから向かうの職員室」

「はい、一緒に来ますか？」

「まあ此所に居ても餓死するだけだし・・・よし一緒に行くか！後右の方保健室在るから静香ちゃんも一緒に連れてっていいかな？」

「いいですよ、では行きましようか」

少女達は一人仲間に加え、保険室へ向かった。

「ところで何で職員室に？」

「車のキー掛かってるかなーと思って」

「そう、意外と賢いのね。あ、」

一行が立ち止まった、何故なら奴らがわんさか保健室前に居るからだ。何体か床に倒れているが。

「どうする、中に入って助ける？」

「はい、中で誰か戦ってるみたいですね。ちょっと手伝ってきます。」

少女はMP40を構え保健室に向かって行った、もちろん前に居る奴らの額に風穴を空けながら。

中に入ると腰まで髪を伸ばした女子高生が木刀持って戦っていた。他に眼鏡を掛けた男子と胸のデカイ校医らしき女性が居る。手当たりしだい奴らの額に穴を空けていく内にすぐに全滅した。

「その銃にその服は・・・？」

やや大人びた容姿を持つ女子高生に聞かれるが。

「イヤ、気にしている暇は無いのでは？取りあえず一緒に行きます？」

「その意見に賛成だ。鞠川校医、使える医療品を入れたな。行くぞ」
一行はさらに三人を加えて保健室を後にした、もちろん後の三人も

居る。

「ねえ、銃とか木刀とか在るのに何で殺らないの？それだけ在れば楽勝じゃない」

鞠川校医が声を掛けてきたが少女は無視した、代わりに容姿が大人みたいな女子高生が答える。

「鞠川校医、確かに奴らの頭の狙えばすぐに倒せるが体力と銃弾の無駄だ。木刀を降れば体力を消耗し、銃を撃つてば弾が消耗する。遭遇した時は受け流せばいい。」

そう言って近くの奴らを床に押し倒す、そして鞠川校医が血だまりに滑って転んだ。

「いゃん！もう何なのよ！」

「走るには向かないファッションだからだ」

鞠川校医のスカートを破る、綺麗な生足が見えて眼鏡の男子高生が赤面しているが。

「もうプラダなのに！」

「ブランドと命、どっちが大事だ？」

「うゝん、両方！」

子供の様に駄々を捏ねる鞠川校医であった。

「良かったなハーレム石図、死ぬ前に見れて。」

「誰が石図だ！？俺は石井だ！」

「へいへい」

その時二階から悲鳴が聞こえた。

職員室へ（後書き）

て、手が痛いな。気のせいかな・・・？

誤字脱字が在れば感想にて

脱出1（前書き）

謎の美少女の名前が明らかになります。

ジェラル星人「まさか魔王様では在るまいな」

ビーーーーーー！

ジェラル星人「お茶！」

脱出1

二階に駆け上がったらしゅールな光景が広がっていた。

ツインテールの女子高生がドリルで奴らの額に刺している、これをしゅールな光景と言わずとも言えんだろう。近くにネイルガン持った小太りな男子高生があ然していた。

隣の上の階から男子高生の声が聞こえ、左に奴らの後ろに男子高生二名が駆け寄って来た。

「私は右の二体をやる！」

「麗！」

「左を抑えるわ！」

「俺も左を！」

モップを槍みたい改造した武器で麗と呼ばれた女子高生が左に居る一体の奴らの額に突き刺した。

もう一人の男子高生はステンレスの棒で奴らの頭を叩き割る、そして不良っぽい男子高生は鉄バットで目の前に居る奴らの頭を殴打した、毒島とは二体の奴らを既に片付けていた。小太りな男子高生もネイルガンを奴らの額に釘を命中させていく。一方、男子高生二名と少女と毒島を除く一行はただ突っ立てるだけであった。

「イヤアーーーーーア！」

全滅をしたと思いきや、叫びながら来る奴ら（ゾンビ）数体がこちらに突進して来た。

一体は武装親衛隊の制服を着ている、残りはえらく痩せ細った貧しい格好だ。

「武装親衛隊！？まさかゲームから飛び出してきたのか！」

小太りな男子高生が何か叫んでいる、ただ突っ立っていた少女は走る奴らに向けてFG42をフルオートにして撃ちまくった。次々と命中しているが一体にしか頭が命中してない、しかも少女は叫ぶ奴らに向かって行った。

「FG42にMP40、降下用の迷彩服！降下猟兵か！？しかも着ているのは美少女だ！」

また小太りな男子高生が叫んでいるが少女は気にしない。

銃撃で何体かは倒せたが残り二体は少女に殴りかかろうとするが至近距離でFG42を撃たれ絶命する。

少女は再びFG42を発砲しようとするが返り血が機関部に付着し撃てなくなってしまった。

残り一体の武装親衛隊は掴み掛かろうとするがひらりとかわされMP40のフルオートを至近距離喰らいすぐに力尽きた、小太りな男子高生が「FG42がー！」と叫んでいた。

「鞠川校医は知っているな？3年A組毒島冴子だ」

「小室孝、2年B組」

「去年全国大会で優勝された毒島先輩ですよ！わたし槍術部の宮本麗です」

「あ、えっと、に、B組平野コータです」

「後ろにいるのは道中出会った者達だ、そこに居る二人は？」

どうやら二人は忘れられては居なかったようだ。

「3年の羽方蓮縫だ、言っておくが何所も噛まれちゃいないぜ」

「あ、伊藤さん生きてたんだね。同じく3年の高島葉です」

「で、その血まみれの迷彩服着たそいつの名前は」

蓮縫と呼ばれる男子高生が少女を指さした、少女は名乗ろうかと迷いオドオドしている。

「えーと、私の名前ですか？クリスティーナ、クリスティーナ・レミー・スターリングです、レミたんと呼んでください。他にもありますが聞きますか？」

「い、嫌、もういいから！これ以上長k」

「な、何よ、そんなコスプレ女のこと信じて。」

突然、ツインテールの女子高生がぶつぶつと喋り始めた。

「ふ、うわーん」

急に泣き始めるツインテールの女子高生、毒島はそっと近寄る。近くに居るクリスティーナは懷から板チョコを出しツインテールの女子高生に渡そうとするが。

「い、いらないわよ子供じゃあるまいし。組はそのデブオタと同

じよ、名前は高城沙耶」

高城が名乗ると生存者達は職員室に入り、残りの中で名乗ったと言
う。

脱出1（後書き）

誤字、脱字、要望があれば感想にて。

脱出2（前書き）

SS兵士「やっとここまで来たか」

作者「さて、どうすりゃいいのか」

魔王「このまま一気に行ってみRO！」

脱出2

取り敢えず職員室に入り、ドアにバリケードを築いた一行。残りはそこで自己紹介をする。そして高城沙耶は顔を洗っていた。眼鏡を掛けはじめたので平野が質問する。

「高城さん、視力が悪いですか・・・？」

「普段はコンタクトレンズだからよ」

「眼鏡っ子だ・・・。」

照れる平野。

そして毒島が口を開く。

「みんな息が上がっている、暫くここで休憩しよう。」

「所で鞠川校医、全員乗せられる車なのか」

「うう、コペンです・・・。」

と、ショックを受ける鞠川。

そして毒島はあること思い出す。

「遠征用のバスはまだ在るか？」

「はい、まだ在ります」

平野が返答する。

次に毒島はバスのキイが在るか確かめる。

「バスのキイは在るか」

「ああ、まだ在るぜ」

蓮縫が鍵掛けからバスのキイを取り出す。

「バスはいいけど、何所へ？」

「家族の無事を無事を確かめます。近い順のみんなの家廻って、可能ならば一緒に連れて行って、その後は安全な場所を探して、それからレミーの両親が居るならその人も一緒に連れて行くとか」

「ふえ、私は家族も居ませんよ、お姉様が居ますけども」

クリスティーナはこう返答する。

「ああそうか、だったらそのお姉様が途中に居たら、引き取ってもらうか一緒に連れて行こうか。」

孝が喋り終わると、高島が意見を出す。

「安全な場所て、在るのかな。」

高城は即返答する。

「在るに決まってるじゃない、警察や自衛隊が動いてるみたいだし、地震や台風の時みたいに避難所とかが・・・どうしたの？」

「な、なんなのよこれ」

麗がテレビを見て絶望をしていた。
一同がテレビに視線を向けたのか、その隙にクリスティーナは急いで新しい戦闘服に着替え始める。

しかし、伊藤は見ていた。雪の様な白い肌と綺麗に整ったスレンダーなボディを。

『各地で頻発暴動に対し政府は緊急対策の検問を始めました。しかし自衛隊の出動に対し野党から反発が相次ぎ』

「暴動てなんだよ、暴動で！」

と、途端にチャンネルを変える毒島。

『地域住民の被害は拡大しつつ、あ！発砲です！警官隊が発砲し始めました！発砲した状況は分かりませんが……』

突然、砂嵐が始まり映像がストップする。

『きゃ！いや、なに、嘘！？助け、きゃあああああ！』

場面がしばらくお待ちくださいと出た、そして映像がスタジオに変わる。

『何か問題が起きた様です、ここからはスタジオからお送りします』

「それだけかよ……どうしてそれだけなんだよ！」

「パニックを恐れているのよ」

「今更!？」

「今だからこそ、よ。恐怖は混乱を生み出し、混乱は秩序の崩壊を招くわ、そして・・・どうしたら動く死体に立ち向かえるというの？」

「え、つまり・・・その時は映画みたいに噛まれて仲間入りってわけ・・・？」

「そうよ、鈍くさいくせに中々良いこと言うじゃない」

伊藤の意見に対し高城は失礼な回答をする。

その後もテレビのアナウンスは続く。

『屋外の外出は出来るだけ控えてください、また自宅などのドアや窓を可能な限り補強してください、何らかの理由で自宅に居られなかった場合各自治体の指定避難場所に・・・それからもう一つ、もし暴徒に遭遇した場合逃げてください、出来るなら武器を使って脳を破壊してください、もう一度言います、脳を破壊するのです。』

『えー、現在ドイツ各地では武装親衛隊に扮したネオナチが各地で暴動を起こしています、既に死傷者は多数出ておりその数は計り知れません。現在政府では治安部隊を送って対処しますが未だ沈黙しておりません。こう言ったものがアメリカやロシアでも起こっており、アメリカでは州軍、ロシアでは治安部隊を送って対処しております・・・』

毒島はリモコンのスイッチでテレビを切った。

「朝ネットを覗いた時はいつも通りだったのに……」

「信じられない……たった数時間で世界中がこんなことになるなんて……」

麗は孝にしがみつく。

「ねえ、そうでしょ？安全な場所あるわよね？きつとも通りに……」

「あるわけないしー」

「おい、そんな言い方ねーだろう！」

蓮縫が高城の突っ込む、そして高城はさらに続ける。

「パンデミックなのよ、仕方ないじゃない！」

「パンデミックだと……？」

「感染爆発と言うことか……」

「そ、そうよ。」

永の察しに高城の口は止まったが、また喋りだす。

「インフルエンザの様な物よ、まさに1918年のスペイン風の様にね」

「あ、私それにかかって閉じこめられました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

クリスティーナの答えに一瞬静まりかえったが、クリスティーナを無視し話しは続行する。

「最近だと鳥インフルエンザがあるわ、スペイン風は6億人以上感染して、死者は確か、5000万人くらいだったと思うわ」

「それだったら14世紀の黒死病に近いかも・・・」

「どうやって流行が終わったんだ？」

「いろいろ考えられるけど、人間死にすぎると終わりよ。感染する対象が居なくなるから」

「でも、死んだ奴ら動いているよ」

「これから暑くなるし、肉が腐って骨だけになって動かなくなるかも」

「どの位で動かなくなるのだ？」

「夏なら二十日で在る程度一部が腐るわ、冬だともっと掛かるかも・・・」

「腐るかどうかわかったもんじゃ無いわよ」

異議があるのかまた口を動かす高城。

「どういう意味だよ」

孝が高城に聞いたが代わりに蓮縫が答える。

「先見たろう、明らかに4、50年前の死体が動いていた。しかも60年くらい前の死体も動いている。普通死後10分で死後硬直が起きるでそれから加速的に腐る、だが此奴等にはそれが見れね、だとすると」

「そう言うことよ、動く死体なんて医学の対象じゃ無いから、下手するといつまでも」

毒島は「いつまでも続くな」と思ったのか中断させる発言をする。

「家族の無事を確認した後、何処か安全な場所に逃げ込むしか無いな。好き勝手に動いては生き残れん、ともかくチームだ、チームを組むのだ！」

「「おー！」」

「皆さーん、注目！」

突然後ろからクリスティーナが声を上げる。

一同は彼女に視線を向ける、そして平野は声を上げる。

「おー！これはM36野戦服にシュツルムヘルメット！一体何処から！？」

そこに小さなドイツ国防軍の兵士がいた。しかし平野と伊藤を除く

全員が呆れていた。

「おいおい、分かり難くしてどうすんだよ」

「これでは見分けが付かん」

蓮縫や毒島から呆れた台詞がくる。

「ぶーだ、もういいよ……」

クリスティーナのお披露目は見事失敗する。

しかし全員はMP40の弾倉が増え、ワルサーP38追加されているのに気付かない。

そして職員室前にいる奴らを平野が釘打ち機で黙らせ、一行はバスへと向かう……！

脱出2（後書き）

長文字かな・・・？

誤字脱字があれば感想にて！

脱出3（前書き）

クリスティーナ「ねえねえ作者さん、私の設定はいつ書くんですか？」

作者「知らんな・・・・・・・・・・・・・・・・」

クリスティーナ「むう・・・・書かないなら、殺す！」

スターリングMk7を作者に向けて撃つ。

ダダダダダダダ！

作者「ぐわあああああ！」

※この短機関銃はゴム弾です。（ちなみにゴム弾でも結構痛いそうです）

脱出3

早速前に居る2体の奴らを始末すると、突然3体の奴らが出てきた。

「ここからは私の番!」

前に出たクリスティーナはワルサーP38をガンベルトから取り出し正確に奴らの頭を撃ち抜いていく。すぐに3体は沈黙した、一同は「いつの間に付けてたんだ?」と思っているが、平野は目を輝かせるばかりである。

「最後に確認しておく、無理に戦う必要は無い避けられるだけ避ける転ばすだけでいい!」

「連中、音だけには敏感よ!それから普通のドアを破れるくらい腕力があるから掴まれたら喰われるわ、気をつけて!」

毒島と高城は一同に釘を刺す、だがしかし。

「キャーーーーー」

「!?!」

女子生徒の悲鳴が聞こえる。

「ほら、言わんこっちゃ無い」

「よし、助けに行くぞ!」

一同は早速悲鳴が聞こえた方へ向かう。

階段の所で悲鳴上げたらしき女子生徒と男女数人が10体ほどの奴らに囲まれていた。

クリスティーナは懷から銃剣を取り出し鞘から出す。

「卓造……」

「くそ、下がってろ！」

バット構えた少年の前の奴らの頭に釘が命中し倒れる、次の瞬間、毒島、小室、麗が6体ほど奴らを叩いていく、残り3体はクリスティーナの銃剣で頭を切り落とされ頭の無くなった体はその場に倒れた。

しかし彼女は止まらない、ワルサーP38を女子生徒の頭に向け、MP40を残りの数人に向ける。

「あ、ありが」

「大きな声を出すな、噛まれた者はいるか？」

「え……居ません、居ません！」

そばかすの少女は答えるがクリスティーナは銃を下ろさない。

「大丈夫みたい、ほんとに」

麗も言うが彼女はまだ銃を下ろさない。

「ねえ、もう下ろしてあげ……っ!？」

麗はクリスティーナに銃を下ろす様に近くに寄ろうとしたが凄まじい殺気で全身から鳥肌がたつ。

彼女の顔が狂気じみていた、瞳の色は青から獣のような黄色く変色しており見るからに相手を殺すことしか考えていないように見える。しかし次の瞬間、毒島がクリスティーナを平手打ちした。

「い、痛い……」

「今はふざけてる場合いではない、協力できないのでならばまず君を殺す……!」

「う、ごめんなさい……」

突然元の顔に戻るクリスティーナ、それを確認した孝は助けた男女数人に聞く。

「僕らは学校から脱出する、一緒に来るか？」

「はい、行きます、行きます!」

即答だった、だがクリスティーナは。

「足をひぱったら殺してやる」

「おい、レミーやめろ!」

クリスティーナの脅しに突っ込む孝、蓮縫は卓造と呼ばれる少年に話しかけた。

「おい、そこのお前、首に巻いてるタオル外しとけよ」

「え、何で？」

「いや、困るだろう。そのタオル掴まれた時」

「あーそうか、ありがとう」

階段を抜けようとすると、靴箱前に奴らが複数いた。

「やたらと居やがる」

「手榴弾ならここにありますが使いますか？」

と、クリスティーナは棒付き手榴弾を取り出すが高城に止められる。

「そもそも、見えてないから隠れることもないのに」

「じゃあ、高城が照明してくれよ」

「例え、高城君の説が正しいとしてもこの人数では静かに動けん、校舎の中を進み続けた襲われた時、身動きが取れん」

「玄関を突っ切るしかないのね」

「誰かが、確かめるしかあるまい」

誰かが手を挙げるだろうと周りを見渡すと、孝に目が合う、だが。

「僕が「私いきます」！？」

突然クリステイナーが志願した、孝は静かに突っ込む。

「いや、君はここに残って皆を・・・」

「私の方が早いと思う、小ちんはリーダーやってなよ」

そう言ってクリステイナーは掛けだしていった。

「小ちんって・・・」

「プッ！」

孝は唾然していた、誰か吹き出しているが。

そうしている間にクリステイナーは音も立てず奴らを避けていく、
見ている彼等は美しい舞を踊っているようにしか見えない。クリステイナーは足を止め、落ちている上履きを見つけると放り投げた。
奴らは吸い込まれるように音が鳴った方へ向かっていた。クリステイナーが合図を送ると一行は扉の方へ向かう、しかし彼女は止まらなかった。

「おい、何突っ立て・・・」

蓮縫が聞こうとした瞬間。

『ガキイイイイイイン』

どうやら刺又を持った少年が金属にぶつけたらしい、そした孝は叫ぶ。

「走れ!!」

大きな音で奴らは彼等に向かってくる。

「何で声出したのよ! 黙っていれば手近な奴だけ倒してやり過ぎせば良かったのに!」

「だってあんなに音が響くもん、無理よ!」

高城の後ろにいる奴らを毒島が倒す。

「口より足を動かせ、バスまで一気に行くぞ!」

その頃クリスティーナは1体の白衣を着た男をワルサーP38で撃っていた、しかし伊藤に止められる。

「変なところ撃ってないで、走る、走る!」

伊藤に止められたクリスティーナはワルサーP38の弾倉交換リロードを行いますすぐに奴らの額に穴を空けていく、そしてM24型柄付手榴弾の安全ピンを抜き奴らの集中する方へ投げ数体を爆殺する。

何体かは這いずりながら来るが無視する。MP40に取り替え、銃口を奴ら足に狙いを付け撃っていく。

「よし、バスに付いたぞ!」

誰かがバスに付いた様だ、クリスティーナもバスに向かってダッシュする。

平野は窓を空け安全確認を行う。

「右翼確認、左翼確認、前方・・・クリア!」

と平野は確認終わると直ぐに援護射撃開始した。

「小室君、全員乗った!」

「先輩が先に!」

「・・・くれえ!」

眼鏡を掛けた男を筆頭に数十名がこちらに向かってくる、後ろには先ほどの走る奴らが呻り声を上げながらその数名を追いかけている。

「3年A組の紫藤だな」

「紫藤・・・」

後ろで麗が小声でその顔は憎しみで満ちている。

「どうする、ほっというて行くか?

「いや、連れて行く」

蓮縫は孝に聞くがその孝は連れて行くと判断する。

「もう出せるわよ!」

「もう少し待ってください!」

「あんな奴助けることないわ!」

「麗！何だってんだよ、一体！」

「助けなくていい、あんな奴死んじゃえばいいのよ！」

孝と麗は口論を始めた。

この間クリスティーナは屋根に上がり援護射撃を始める。

MP40の9mmパラベラム弾は奴らの体や頭に吸い込まれていく。

「皆さん、急いで！絶対助かりますよ！」

「アーン！」

眼鏡の少年が受けを狙ってる様な叫び方をして転んだ。
バスの何人かは既に吹き出している。

「せ、先生、足を挫きました、助けてください！」

「おや、そうですか・・・ではこれr」

「ちょっとまた！」

紫藤が蹴ろうとした瞬間、高島がいつのまにか紫藤の近くまで来ていた。

足を挫いた少年の肩を担ぎ急いでバスへ向かう。

「（ち、余計なことを。）」

紫藤は心の中で舌打ちする。

「鞠川先生！」

「行きます！」

「ちょっと待っ！」

孝の合図にバスは走り出す、しかしクリスティーナは忘れられていた。

バスの目の前に呻り声を上げる奴らが現れるが、

ドン！

跳ね殺される。

バスは門をぶち破り一行は脱出した。

脱出3（後書き）

誤字脱字があれば感想にて。

主人公設定（前書き）

久々の更新、1ヶ月ぶりか・・・な・・・？本編では無く主人公設定です。

主人公設定

名前…クリスティーナ・レミー・スターリング（複数あり、他にもある）

イメージCV…MAKO

身長…150??

年齢…?

体重…?

性別…女

装備…P232、ワルサーP38、CZ75（予定）、スターリングMk7（予定）、MP5A5（予定）、MP40、StG44（予定）、MC51（予定）、シグ553（予定）、レミントンACR（予定）、AWS（予定）、Kar98k、銃剣

あだ名…電波娘、貧乳娘、お人形、悪魔の子、女の着せ替え人形

何所から来たのか分からない謎の少女。容姿は絶世の美少女、街を歩けば「可愛い」と言われるほど。

しかしスタイルが悪く、何所かの傭兵に「中まで人形とはな」と言われた。容姿が可愛すぎる為かロリコンや女性にモテる。多重人格者で性格が突然変わったり、口調が変わったりする。同性愛者なのは確実だが何故なったのかは理由は言わない。

趣味は絵を描くこと、漫画やアニメ、ゲームが好きなどかなりのオタク。しかも自分で漫画を書いており、ゲームまで作っている（ほぼエロ漫画やエロゲー、百合系漫画やゲームも）。

銃器の腕は確かに良いのだが、愛銃以外解体や整備は殆どしない。過去に何か在ったかもしれないが此所では証せない。

「スペイン風に雇った」と言ってることから生まれは20世紀初頭か19世紀末期かと思われる。

衣服はドイツ国防軍や武装親衛隊、各国の軍服を好むが軍服には差ほど興味を示さないし、洋服やおしゃれな服、コスプレが好み。

主人公設定（後書き）

エンルスト「これを書いてる暇は無いと思うが・・・」

ダス・ライヒ「大丈夫だ、問題ない」

殺すよ？（前書き）

奇妙なことが起き書き込みが迂闊に出来ない状態に。
本編を余り書かないせいか、ん？

殺すよ？

一行はバスで学校を脱出した。

脱出する前に突然現れた生存者達を回収、その後一緒に脱出。コンビニ前を通過した後バスの車内で揉め事が発生した。

「だいたいよ！」

騒いでいるのは金髪で目付きの悪い、世間でいうなら不良と呼ばれる男子生徒。タチが悪いことに周りに怒鳴り散らしている。

「何で俺達まで小室に付き合わなきゃならないんだ？コイツ等が街に戻るで勝手に決めたんだろう？寮とか学校の中とか安全なところ探して」

それに続いてか気が弱そうな男子生徒が言葉を出す。

「そうだよ。このまま進んだら危険だよ、さっきのコンビニに立て籠もって方が」

「勝手に乗ってきたくせによく言うぜ」

蓮縫が正論を言うが不良は睨み付けた。不良はさらに台詞を続ける。

「今からでも遅くはない、大体俺は・・・」

不良が続けようとした瞬間、バスが急停車した。何所の席から「ぐわぁ」と悲鳴が聞こえる。

「いい加減にしてよ！これじゃ運転できないじゃない！」

鞠川が怒っていた。何故か高島が目を白黒にしている。

不良は次の八つ当たりの相手を探し始め、たまたま目に入った孝を睨み付ける。

「気に入らねえんだよ、コイツが！気に入らねえんだよ、コイツが！偉そうにしやがって！ムカツんだよ！」

平野がネイルガンを向けるが高城に静止される。

孝も不良からの八つ当たりを受けて無言でいたが反論する。

「何だ？僕がいつお前に何か言ったか？」

麗は我慢できず席を立とうとするが、クリスティーナがその前に席を立ち不良の前に立ちふさがる。

「ああ！？誰だ、そこをどけえ！」

不良はクリスを見殺しして通ろうとするが、クリスが道を塞ぐ、そして彼女は懷から消音器付きのP232を取り出し不良に向ける。

「静かにしないと殺すよ？」

「ああん！？エアガン何か向けるんじゃない？」

クリスは隣の座席に発砲した。

消音器は極度に銃声を抑えるアタッチメントの一つだがしかし完全に音を抑えられた訳では無い、後ろの席に座っている女子生徒は悲鳴を上げる。そしてクリスは不良に銃口を向けた。

「ちょ、ま、待て。人にr」

「バン！」

不良は悲鳴を上げ腰を抜かした。今のはクリスが「バン」と言っただけだ。

倒れた辺りを見ると何かの染みが広がっていた。余りの恐怖で失禁したのだろう。

一部始終を見ていた柴藤が拍手をしながら向かって来る。

「素晴らしい！見事なチームワークです！しかしこの様なことが二度と起きない様にしなくては。リーダーが必要です」

「で、候補者は一人て訳？」

柴藤は一瞬動揺したが仕切り直し台詞を続ける。

「当然です。私は教師です。私にはこの一団を責任持って率いる義務があります。どうです、私が成れば問題は起きませんか？」

「で、あいつはただの「噛ませ犬」てことか」

「な、何を言っているのですか？蓮縫君」

凶星だったのかまた動揺する柴藤。

「では皆さん、私がリーダーで賛成ですか？」

後ろに居る男子高生達や女子高生達、失禁した不良は手を上げ、伊

藤が手を上げようとするが毒島に止められた。

「と・・・言う訳で多数決で私がリーダーに成りました。手を上げてないのはあなた方だけですよ」

「ち、出来レースかよ」

蓮縫が文句を付けるが再び不良が睨み付ける。

「てめえ！リーダーに文句あんのかよ！」

そして麗が突然叫んだ。

「先生開けて・・・私ここで降りる、降ります！降ろしてください！」

「え、でもまだ・・・」

鞠川が戸惑っていると麗は反対側の扉から出て行った。そしてクリスティーナも何故か麗に追て行く。

「麗！なんでクリスも！」

「嫌よ！そんな奴と一緒に居たくない！」

「行動が共に出来なければ・・・仕方ないですね」

「あんた！何言ってたんだ！？」

孝は冷酷な柴藤に反論する。

「街まで、街まで我慢するだけじゃないか、それに歩きは危険」

「だから後悔するって言ったのよ」

「だから今は・・・」

バスのクラクションが鳴り、麗とクリスの居る場所に突っ込んで来た。

車内は地獄絵図であり、運転手はブレーキを踏めないようだ。

「やべえ！離れろお！」

蓮縫の叫び声はクリスのMP40の発砲音で消され、バスは車に激突しその後爆発した。

殺すよ？（後書き）

時間がないので次回を待て！
※修正しました。

3人乗りは・・・

バスが近くの車にぶつかった後、横転し爆発した。

運が悪いことに橋の下のトンネルであった為に孝、麗、クリスティーナは閉じこめられてしまった。

クリスがMP40を乱射してその弾丸がバスの燃料を貯場する場所に当たったと思われる。

「小室君、大事無いか！」

今更そんな古い台詞を聞くことが出来るとは、毒島冴子は余程古い家柄で育ったと見える。

「警察署で、東署で落ち合いましょう」

「時間は！」

「午後五時！それが駄目だったら明日の五時に！」

「分かった！鞠川校医、ここはもう進めない」

マイクロバスのエンジンの音が聞こえる。

燃え上がったバスから全身が燃え上がった奴らが出てきたが、やがて力尽きた。

「これからどうするのよ？」

麗が質問し、孝が返答する。

「これからどうしようにも、足が無いしな・・・」

孝が考えている間、クリスは鞆を逆さにして鞆を揺さぶっていた。バラバラと落ちていく物体。その中には小銃や拳銃、弾丸すら混じっている。

そしてクリスは小銃に手を付ける。形からしてマウザーk a r 9 8 kだ。ドイツ国防軍並びに武装親衛隊の戦闘団に幅広く使用された。傑作小銃、7・92?弾を発射する小銃で狙える距離が長い。ためスコープを付けて狙撃銃としても使える。今でもアフリカ辺りで二級戦火器として現役で息の長い銃である。

クリスはk a r 9 8 kにグリップに付いている7・62?弾を装填すると、専用のポーチを付けてから拳銃の方に手を出した。その拳銃の形はリボルバータイプで形式からコルトトルーパーと見える。1953年にコルト社から発売された回転式拳銃、発射する弾丸は357 M A G弾だ。予備の弾をポケットに入れ、立ち上がろうとするが孝に持っている銃に対して質問が来た。

「その銃、なんか格好良いな。ワルサーはどうしたんだ？」

「壊れて使い物にならなくなった」

「ああ、そうか・・・（平野が泣くな。）」

そう言った後、孝はヘルメットを被った奴らに襲われた。

しかしその「奴」はコンクリート製の蓋で殴られ沈黙してそこら辺に倒れた、どうやら麗が殴ったらしい。

「街まで歩いて行く？」

「いや、さっきの奴がメット被っていただろう。そこら辺にバイクとか在るかも」

孝が発言した後、クリスが顔を真っ赤にして怒っていた。

「ぶうゝ」

「ああ、忘れてった。どうしようか・・・？」

迷う孝。

それでもその筈、奴が乗っていたバイクは最低でも2人くらいしか乗れない。

つまり、重武装な少女は乗れないと言うことだ。

「ねえ、孝。やっぱり歩いて行く？」

質問され悩む孝。すると、クリスが指を東の辺りに指した。そこにはサイドカーが在った。

「サイドカー？珍しいな地元に持つてる奴いったけ？」

恐る恐る近づくと、サイドカーは血まみれでだった。

近くには死体が在り誰だか分からない程死体が損壊していた。

「ちょっと！こんな物に乗れって言うの！」

麗が文句付けるが、クリスはハンカチを取り出し血が付いた部分を拭いていく。

「麗、我慢してくれ。この子置いて行っていたら何か後々怖いから、後、置いていって撃たれたらどうする？」

「分かったわよ、一緒に行けばいいんでしょ」

クリスに聞こえない様に小声で話しをする2人。
やがてサイドカーを拭き終えると、3人は乗り込んで街へ向かった。

3人乗りは・・・(後書き)

誤字脱字があれば感想にて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6394t/>

学園黙示録×コール・オブ・デット

2012年1月4日12時45分発行